

安井亮平
(早稲田大学名誉教授)

靱内裕子
(早稲田大学)

安藤 宏
(東京大学)

ヨコタ村上孝之
(大阪大学)

源 貴志
(早稲田大学)

編集『二葉亭四迷全集』(筑摩書房、1984-91)、注釈『日本近代文学大系 第4巻 二葉亭四迷集』(角川書店、1971)他

『日本近代文学と『猿人日記』—二葉亭四迷と嵯峨の屋おむるにおける『猿人日記』翻訳の意義を通して』(水声社、2007)他

『近代小説の表現機構』(岩波書店、2012)、『日本近代小説史』(中央公論新社、2015)、『「私」をつくる』(岩波書店、2015)他

『ミネルヴァ日本評選 二葉亭四迷—くたばってしまえ—』(ミネルヴァ書房、2014)、『色男の研究』(角川書店、2007)他

編集『昇曙夢翻訳・著作選集』(クレス出版、2011)、「『血笑記』から『平凡』へ」(1989)他

安井亮平：ロシアに係わる者にとって、二葉亭とは

二葉亭は、日本でロシアに係わる人が、専門分野に関係なく、等しく直面する問題の原型を示す存在である。あるいは、今日なおそのたどるべき定めを指し示しているときえ思う。少なくとも私にとって、二葉亭はそのような存在である。何かロシアに係わる問題にぶつかると、いつも、二葉亭ならどう考えるだろうか、どう対処するだろうか、私は思い巡らすことにしてきた。私にとって二葉亭四迷がどのような存在であり続けてきたかをお話します。

靱内裕子：「二葉亭らしさ」について

二葉亭の翻訳には、訳し方の根拠が判然としない表現や文章が時として顔を出す。それらは二葉亭の翻訳作品の多くに共通して見られる特徴であり、原文の正確な訳出より自身が好む語彙を優先させた結果であることに気付く。いわば翻訳癖のようなものであり、「いかにも二葉亭」と読者に感じさせる一因ともなっている。本報告では二葉亭の翻訳癖が顕著に表れる数字の訳し方や登場人物の口調などを例に挙げ、「二葉亭らしさ」の正体にせまる。

安藤 宏：近代言文一致体の成立と二葉亭四迷

すでにこれまで論じ尽くされてきた感もあるが、あらためて「あひびき」が近代小説に及ぼした影響について考えてみたい。私見によれば、近代小説の言文一致は、文末詞「～た」の定着と大きく関わっているものと考えられる。その際、「あひびき」が大きな役割を果たしたのは周知の事実だが、平行して書かれていた『浮雲』に与えた影響と、同時にこの文末詞を使いこなすことが困難であった状況について、表現史的な展開を視野において考えてみたいと思う。

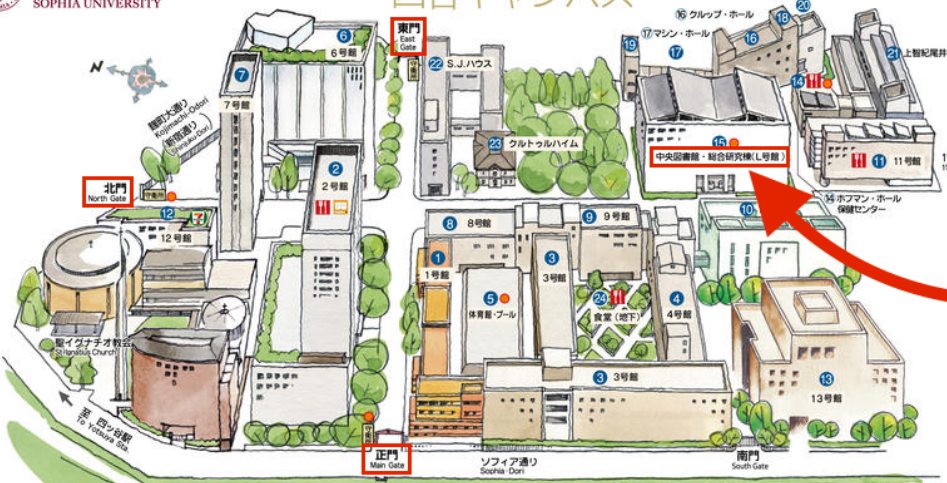
ヨコタ村上孝之：二葉亭四迷のポリグロティズム—国語・国民文学の解体に向けて

二葉亭四迷はバイリンガル文学者という印象が強いが、英語・ドイツ語など複数の言語に精通したポリグロットであった。彼の文学・思想にとってそのことの意味は少なくない。近年、「エクソフォニー」ということが言われ、バイリンガルな文学が注目されているが、バイリンガリズムはネーションの装置としての言語を再構築する危険をはらんでいる。本発表は二葉亭の多言語性を再評価することを通じて、ポリグロティズムを介した国語・国民文学の解体の可能性を探る。

司会：源 貴志



Yotsuya Campus
四谷キャンパス



*入場無料、予約不要、どなたでもご来場いただけます。